

研究ノート

ソールズベリのヨハネスにおける弁証論

—Metalogicon II~IV⁽¹⁾—

柏木英彦

ソールズベリのヨハネスは、クインティリアヌスと並んで自らの人文主義の基礎をなしたケケロに従って⁽²⁾、動物と異なる人間の基本的特長を言語と理性にみる。言語と理性が社会の絆になるとして、言葉、思考、表現の緊密な関係を説き、人間存在の社会的性格を強調する彼は、自由学芸ことに三学科の学習の必要性を力説し、三学科を攻撃する人々は社会の平和を乱すものだと断じている。周知のごとく、ヨハネスは彼らをコルニフィキウスないしコルニフィキウスの徒と呼ぶが、彼らは他人に対し理性によらず侮蔑の態度をもって臨み、学習の意義を認めず、人々を勞せずしてフィロソフスにすると豪語する。基本的人文教育を抜きにした速成の技術教育、ソフィスト的弁証論者に対する批判をも含む『メタロギコン』は序文によればロギカ (logica) 擁護⁽⁴⁾の書で、ここでロギカは広義に表現と論証の理論 (loquendi vel disserendi ratio)⁽⁵⁾を意味し、文法、修辞学、弁証論を指している。しかし文法の規則や三段論法の形式のような技術的問題を扱った実習書ではなく、すべての学科が相互に密接に結びついているような教育理念を説くものである。中世の西欧において、アリストテレスのオルガノン全部を最も早く手にした一人であるこの人文主義者により、弁証論(狭義のロギカ)はいかなる評価を得たのか。

論証ないし推論の理論としてのロギカまたは弁証論 (dialectica) に論及する『メタロギコン』第二巻以下で、ヨハネスはオルガノンの解説を試みてはいるが、しかしオルガノンの註釈を書いたり、その有益な内容を詳細に説いたりする意図はないと断っている⁽⁷⁾。むしろ弁証論に関してポエティウスのみでなくアリストテレスの書物で学習するよう勧め、ロギカを中傷するコルニフィキウスの徒、弁証論を信仰の破壊者と非難する人々に対しロギカの力を評価することを主眼としていて、オルガ

ノン各書の内容、意義については要約する程度にとどめている。

学芸全体における弁証論の位置ないし意義は、第一に他の学科の入口、有効な道具として他のものを整える⁽⁸⁾という点にあり、これなくしてフィロソフィアの探究を正しく進めることはできない⁽⁹⁾。第二に、弁証論はすべての学芸の基礎として重要であるが、他の学科と切離されてはならない。他の学科の力から切離されれば、それは無益に近いとヨハネスが極論しているのは、ソフィスト的弁証論者を念頭に置いてのことであろう。一方、他の学科の力によって生かさされれば、あらゆる誤謬を打破できる、すなわち他のものと結合してこそ輝くものである⁽¹¹⁾。第三に、ヨハネスは弁証論が他の学科に支えられずに果して人の生に役立つであろうかと問い、学知と生との関連を説く。彼は『メタロギコン』序文で生の指針とならない哲学的思索は無益である⁽¹²⁾という、学芸が生との関連をもつ知の追究でなければならぬことを強調している。ところで論証の理論たる弁証論によりプルデンティア (prudentia) の基礎が固められる。弁証論は真理を求めるが、真理はキケロが言うように、プルデンティアの相関者であり、ウィルトゥス (virtus) の源泉である⁽¹³⁾。そしてプルデンティアはウィルトゥスの根幹であるから、弁証論はある意味でウィルトゥスの基礎を成すと言われよう⁽¹⁴⁾。

第四に、弁証論は推論ないし論証の理論という形式学である以上、他の学科との関連を失えば単なる詭弁ないし口論に墮する危険を孕んでいる。そもそも真理を愛する人にとって口論は好ましいものではない⁽¹⁵⁾。ところが四辻で叫んでいる輩は、十年二十年どころか生涯をこれに費すが、しかし彼らは弁証論に携っているとはいえず、年とともに空疎な議論に陥っていく⁽¹⁶⁾。目的を失った詭弁的論議が横行していたことは、ヨハネスの語る次のような挿話にも窺われよう⁽¹⁷⁾。彼は最初アベラルドゥスの下で弁証論を学び、青年の短慮から自らの知を過大視するようになったが、やがて冷静に自己を見つめた結果、ジュヌヴィエーヴの丘を去り、十年に及ぶ自由学芸の研鑽を経た後、ふたたびかつての同僚を訪れたところ彼らは相変らず同じ主題をめぐって空疎な議論を弄んでいたと。弁証論以外の学芸を軽蔑する輩は結局のところ無分別な多弁に墮するほかはない。ヨハネスは、すべての問題、立証を論ずべきではない⁽¹⁸⁾という『トピカ』の一節を引いて、抑制の必要を説く⁽¹⁹⁾。多弁な輩はいつでもどこでも何についても論ずるが、すべての事について知っているからであろうと皮

肉っている⁽²⁰⁾。対話はなるほど有益ではあるが、しかし誰とでも論じ合おうとすべきではない⁽²¹⁾。節度を知らぬ鉄面皮は青年を教育するよりは、むしろ歪めるものである⁽²²⁾。一定の専門用語と形式論理の習得により、議論のための議論に陥るソフィスト的弁証論者の立場は、ヨハネスからすれば、言葉を単なる道具のごとく扱い、時間をかけた精神の錬磨を否定することによって、文化と社会の基礎を揺がすことになる。だがヨハネスにとって、エロクエンティア (eloquentia) とは単なる弁舌の才ではなく、サピエンティアの伴わないエロクエンティアは無益であるとの一句が示すように、人格に裏付けされた表現のハビトゥスにはほかならない。

ヨハネスはアリストテレスに従って推論を論証的 (demonstrativa)、蓋然的 (probabilis)⁽²⁴⁾、詭弁的 (sophistica) の三種に分け、詭弁的推論について、真実在 (existens) よりはむしろ外見 (apparens)⁽²⁵⁾ を求めるものとしているが、しかし教育上ある種の意義は認めている。すなわち詭弁的推論の知識を欠いては虚偽を避けることも、欺く者を見分けることもできないゆえ、フィロソフスと誇ってみても空しい。したがって詭弁的推論の訓練は、巧みな言い廻しのためにも哲学的探究のためにも意味があるが、しかしもとよりそれも、その果実が真理 (veritas) であって馱弁 (verbositas)⁽²⁶⁾ でないという条件の下においてである⁽²⁷⁾。詭弁的推論はあくまで真理の famula であって、adultera⁽²⁸⁾ ではない。それゆえ弁舌にまつわるソフィスマを見抜けるよう精神を強くするため詭弁的推論の学習は必要であっても、それ自体目的ではない。したがってその研究にあまり時間をかけすぎないようヨハネスは忠告している。

一方、論証的推論と蓋然的推論はいずれも真理を愛する人にとって重要である⁽²⁹⁾。前者は必然的方法すなわちそれ以外にはあり得ないという意味での必然的論証であるが、人は自然についてその諸力を知ることはできず、たとえきたとしてもそれは稀なことであるから、これはむしろ数学とりわけ幾何に典型的な論証である。数、比例、図形に関しては、たしかに他の様にはあり得ない結論が得られる⁽³¹⁾。しかし幾何学はイベリア半島やアフリカは別として「我々の間」では知られておらず、必然的方法を探る論証術を用いる人は稀であるとヨハネスは記している⁽³²⁾。ウェップによれば、シャルトルのティエリの『ヘプタテウコン』も『分析論後書』には言及していない⁽³³⁾。

ヨハネスが最も重視するのは、むしろ蓋然的推論であり、これを扱う狭義の弁証

論である。久しく先人たちに利用されなかった『トピカ』が再発見されたことを彼は喜んでいるが、この箇所は『トピカ』に論及する『ヘプタテウコン』を指すのではないかとウェップは註記している⁽³⁴⁾。『トピカ』なくしては人はただ偶然に議論する⁽³⁵⁾のみで、アルス (ars) によっているのではない。弁証論はフィロソフィアのあらゆる部門へ通ずる安全な道を用意するところの有益なアルスである。彼が『トピカ』を重視するのは、人間の知が大方蓋然性の追究⁽³⁶⁾にあり、蓋然的推論がきわめて安全な道であるという彼自身の知識論に依るのであろう。彼は『メタロギコン』序文で自分の主張は蓋然性をもつことで満足であると表明し、自らアカデミアの徒⁽³⁷⁾ (academicus) と称している。そして三種のアカデミアの徒を挙げているところで、自らのそれは賢者にとって疑わしいことについて意見を軽々にしない者の謂であると規定する⁽³⁸⁾。『トピカ』に基づき、時と場所を問わず、主題を選ばず論じたりすべきでない⁽³⁹⁾と彼が言うのは、論議を許さないもの、人間の理性の及びがたいものがあるという理由にも依るのである。彼はオルガノンの価値を説いてアリストテレスを讃美する⁽⁴⁰⁾のが自分の意図だと述べているが、しかしこれはあくまでロギカに関して⁽⁴¹⁾であり、その神観などについては誤りを指摘する⁽⁴²⁾。アリストテレスはたしかに青年をフィロソフィアの研究に向かわせる師であるが、しかしそれは議論に関して⁽⁴³⁾であって、倫理 (mores) についてはない。

上に述べたごとく、ヨハネスは自らアカデミアの徒と称し、蓋然的推論を扱う狭義の弁証論を重視するので、彼の知識論を一瞥しておく必要がある。感覚と想像力から生ずる opinio、理性から生ずる scientia ないし prudentia、⁽⁴⁴⁾知性から生ずる sapientia⁽⁴⁵⁾ という知の三段階の中、ヨハネスが他の二つに比して詳しく論及しているのは理性の作用である。理性は事象の観察と吟味を望み、有益なもの、価値あるものを識別して⁽⁴⁶⁾、真理を究めようとするが、その力は不完全であるという主体の側の条件により、また対象の側の崇高、広汎、移ろい易さのゆえに⁽⁴⁷⁾、真理の完全な把握は不可能であり、人間の知は多くの場合、蓋然性とどまる。あるがままの真理の把握という神、天使の完全さを熱望し、その観想に悦びを味う程度に応じて、人はそれに向かってより近く登高するのである。それならば真理への近迫は、事象の客観的知識の集積によって可能なのか。理性はすべての無秩序な衝動を抑制し、すべてを善の規範に従って⁽⁴⁸⁾整えるとも言われているからには、知る者自身の在りよう⁽⁴⁹⁾

⁽⁵⁰⁾

と無関係ではないであろう。

ヨハネスは知解を妨げるものとして、理性の力を越えるものがあること、人間の条件の脆弱、生の短さ、有益なものの軽視、無益なものに没入すること、蓋然的な諸見解の葛藤、罪、探究すべきものの広汎なことを列挙した⁽⁵¹⁾後、自己にさして関係ない多くの事柄に心を奪われ自己を忘れることはほど有害なことではないとして、自己を知ることは最高のサピエンティアといってもよいほどであると結論する。「諸元素とそれらにより構成されたものの本性を知り、量と数の比例を認識し、推論の構成に注目し、あらゆる事柄について蓋然的に論じながら、自己自身について無知であるとすれば一体何の益があろう。」⁽⁵²⁾それゆえ真理への登高には単に学知の集積では足りず、己れの内面にウィルトゥスを育成していく努力が不可欠であり、そうでなければ正しく哲学しているとは言われない。⁽⁵³⁾アルスについて語るのは容易だが、実行は難かしい。医師は治療に関して、倫理学者は道徳律に関して多弁であるが、⁽⁵⁴⁾現実に実行することは容易でないというヨハネスの言葉には、知と生との一致への要請が込められている。

サピエンティアの「果実は善にたいする愛とウィルトゥスの育成にあるゆえ、理性はサピエンティアを求め、個々の場合に正しい判断ができるよう事象を究めねば⁽⁵⁵⁾ならない。」サピエンティアはウィルトゥスという倫理的要素を含んでおり、一方先に見たごとく、真理を究めるプルデンティアは徳の根幹である。人は完全になる⁽⁵⁶⁾ほど真理を求めるものであるから、真理への登高は自己の内面の在りよう⁽⁵⁷⁾と不可離の関係にあると言えよう。「真理は精神の光であり、精神の主要事である。」すなわち真理とは理性を照らし強固にすることであり、理性の特徴は真理を求め、それに⁽⁵⁸⁾到達することである。光が取去られれば視覚は働かないごとく、真理が取去られれば⁽⁵⁹⁾理性の知はすべて妨げられる。そして「真理 (veritas) が確実性 (certitudo) の基礎である」との一句にはとりわけ注目しなくてはならない。人間に関することは移⁽⁶⁰⁾ろろものであり、また先に言われた人間の条件のゆえに、判断 (judicium) は確実 (certum) でないことが多いにしても、真理が理性の光として確実性の根拠であるからには、判断の確実性は真理への登高の高さに比例することになる。理性は、真理が精神を照らす光として自己の内面に輝くよう内面を整え、真理が見えてくるようにウィルトゥスを培わなくてはならない。個々の場合、正しい判断は自己の内面の

光の強度に相関的であるから、価値の識別は人の内面の在りように依存すると言えよう。

倫理学は美 (decor) をもたらす点にすべてに優る⁽⁶¹⁾とされているが、ソールズベリのヨハネスにおいてアルスは人格美を養うことに係わる。グランマティカはフィロソフィアの揺籃⁽⁶²⁾としてフィロソフィアへ到るための必須条件という地位が与えられ、弁証論は人の知の程度に応じて有益な⁽⁶³⁾のである。弁証論以外のアルスを全く省みない風潮にも、弁証論を聖書研究に有害だとして敵視する傾向にも抗して、彼は弁証論の意義を明らかにし、アルスの体系中に一定の位置を与えている。言葉と理性の錬磨を目指すフィロロギア、サピエンティアを求めるフィロソフィア、ウィルトゥスを培う⁽⁶⁴⁾フィロカリアは、人間性の形成という理念に従って相互に秩序づけられ均衡を維持しているのである。

註

- (1) 『メタロギコン』の引用は C. Webb (ed.), Joannis Saresberiensis Episcopi Camotensis Metalogicon, Oxford, 1929 (以下 W と略記) によるが, Migne, Patrologia latina 199 (以下 M と略記) の該当頁を併記する。

参考文献

- G. Misch, Johann von Salisbury und das Problem des mittelalterlichen Humanismus, 1960.
 H. Liebeschütz, Medieval Humanism in the Life and Writings of John of Salisbury, 1950.
 D. McGarry, "Educational Theory in the *Metalogicon* of John of Salisbury", in *Speculum*, XXIII (1948), 659~675.
- (2) Cicero, De Officiis, I, 16, 50.
 (3) I, 1, W 5, M825CD. (4) I, prol., W 3, M824D.
 (5) II, 1, W 60, M857C.
 (6) 拙稿「ソールズベリのヨハネスのグランマティカ論と人文教育の理念」(慶応義塾大学言語文化研究所紀要第3号, 1972年)参照。
 (7) III, 10, W 164, M916B. (8) II, 11, W 83, M869C.
 (9) II, 16, W 90, M873B. (10) II, 9, W 176, M866C.
 (11) IV, 28, W 194, M932B. (12) prol., W 4, M825B.
 (13) II, 1, W 61, M858A. (14) II, 1, W 61, M857D.

- (15) II, 1, prol., W 60, M857B. (16) II, 7, W 72, M864B.
- (17) II, 10, W 82, M868A. (18) Aristoteles, Top. II, 11, 105a2.
- (19) II, 8, W 75, M866A. (20) II, 8, W 76, M866B.
- (21) III, 10, W 163, M915B. (22) Ibid.
- (23) II, 8, W 75, M865D. (24) IV, 22, W 188, M929B.
- (25) Ibid. (26) IV, 22, W 188~89, M929B.
- (27) IV, 22, W 189, M929B. (28) Ibid.
- (29) II, 5, W 68, M862A. (30) II, 13, W 85, M870D.
- (31) II, 13, W 86, M871B. (32) IV, 6, W 171, M919D.
- (33) IV, 6, W 171. (34) III, 5, W 140.
- (35) II, 15, W 89, M873B. (36) III, 10, W 163, M916A.
- (37) prol. W 4, M825B. (38) IV, 31, W 199, M935B.
- (39) III, 10, W 163, M915B. (40) IV, 24, W 191, M930D.
- (41) Arist. Top. IV, 3, 126a 34.
- (42) ヨハネスがアリストテレスの誤りとして挙げているものが、すべてアリストテレスの原典に基づいているわけではない。
- (43) IV, 27, W 194, M932A. (44) IV, 12, W 178, M923D.
- (45) IV, 19, W 184, M927A. (46) I, 1 W 6, M825D.
- (47) IV, 38, W 211, M941D. (48) IV, 41, W 215, M944B.
- (49) III, 10, W 164, M916B. (50) IV, 17, W 183, M926AB.
- (51) IV, 40, W 213, W942D. (52) IV, 40, W 214, W943C.
- (53) IV, 40, W 214, M943D. (54) II, 9, W 77, M867A.
- (55) II, 1, W 61, M857C. (56) IV, 39, W 211, M942A.
- (57) IV, 39, W 211, M942A. (58) IV, 39, W 212, M942C.
- (59) Ibid. (60) IV, 13, W 178, M942A.
- (61) I, 24, W 55, M854C. (62) I, 8, W 31, M840A.
- (63) II, 9, W 76, M866C. (64) IV, 30, W 196~7, M933D.